

財団法人 8020 推進財団

平成 19 年度 歯科保健活動助成交付事業報告書抄録

1. 事業名 : 年齢別口腔機能状態の解析による歯科介護予防の実態と対策
(千葉県柏市における先駆的な歯科介護予防システムの構築)

2. 申請者名 : 大石善也、金剛寺高宏、甘利貞文、八木浩一、榎本一彦、矢部布志夫

3. 実施組織 : (社) 千葉県柏歯科医師会

4. 事業の概要 :

(社) 千葉県柏歯科医師会では、介護予防口腔機能向上の特定高齢者抽出検査を地域協力歯科にて検査するシステムを構築している。この対象者の年齢別口腔機能の状態を検索することで、その実態と将来を予測し、早期介護予防対策を検討する目的にて解析を実施した。

5. 事業の内容 :

《対象と方法》

協力歯科でのスクリーニング事業の啓発を、事業リーフレットを 2 万枚作製し、行政・介護関係者から 1000 名のサポーターが高齢者に手渡しする戦略とした。その中から、正確な健診方法にて抽出されたことを確認した 10 協力歯科医院における対象者 252 名において、基本チェックリスト 3 項目(食べにくい・むせる・口渇)の客観的な聞き取り、歯科医師による RSST 計測と歯科衛生士による口腔衛生状態の判定を年齢別について考察した。

《結果》

1. 年齢別対象者の口腔機能状態 : 対象者の年齢構成は、65 歳以上 70 歳未満、70 歳以上 75 歳未満、75 歳以上の人数はそれぞれ、44、93、115 名の総数 252 名であった。咀嚼力の評価(食べにくい)の抽出率は、24,2%を示し、各年齢とも同程度であり、4 人に一人が咀嚼に不具合を感じていた。嚥下障害を押し量る(むせ)は、34,1%の約 3 人に一人の割合に認められた。しかしながら、年齢的な変化を認めないことより高齢期になるにつれて、その自覚症状が少なくなることが示唆された。口腔乾燥を評価する口渇は、53,2%の方が主観的に感じており、年齢による変化としては後期高齢者と呼ばれる 75 歳以上から著しく増加していることが示された。嚥下運動の惹起性を測る検査方法である RSST は、65 歳以上 70 歳未満が 18,2%と低値に比較して、70 歳以上になると 30%以上と著しく増加している。本研究では RSST の低下は 70 歳からすでに増加していることが示された。口腔衛生状態は、75 歳以上において著しく低下(31,7%)している結果が示され、70 歳以上 75 歳未満の年代からの情報伝達と指導が重要であると考えられた。

2. 年齢別対象者の RSST と基本チェックリストとの相関関係 : RSST は 70 歳を超えると、口渇・むせる・食べにくいという聞き取り項目とそれぞれ同程度に相関し、75 歳以上ではむせる・食べにくいという項目に著しく相関することが示された。また、口腔衛生状態は、70 歳より口渇・食べにくいという聞き取り項目に相関し、75 歳以上では口渇・むせる・食べにくいというすべての項目に相関することが検証された。

6. 実施後の評価(今後の課題) :

特定高齢者の決定は、高齢者が主観的に判断し、日常口腔を観察しない医師が診断することより正確性に問題が生じるが、本データは歯科からの抽出でありより実態に近いものである。また、本システムでは、口腔機能の状態と、衛生状態の低下を早期から回復できることで、効率的な診療体系(定期健診型歯科介護予防事業)を構築できる。まだ、事業の認知不足から N 数が少ないことが課題であるが、データを蓄積し柏市の人口動態と比較することで、後期高齢者の口腔機能状態が予測され、新たな早期歯科介護予防対策が構築される可能性がある。

